らんとする氣色なれば、松宗物をもいはず、づか〳〵と走行て押出すに、彼者は是非に入らんとするを、力に任せて押出ば、拍子に連て磕と轉たる音して、其後は見へずなりぬ、靜に座に歸り又元の如く胡座せり、最怪しく思ひながら、人にも語らざりけるに、其夜村の者來りて咄す樣は、近在近鄕に疫病流行し、村毎に過半病死す、忝きは此寺に大法會のある故にや、此村に一人も病者なしと賞嘆せり、爰に於て松宗、扨も今日かやう〳〵の事有し、村里にも見ぬ怪しき者來れり、是や疫神といへるものかといふに、一座左にこそあらんと、いよ〳〵修行怠慢なかりしかば、衆僧三百餘人より下部に至る迄、村を限りさらに病患なかりけると也、○中略是等皆疫鬼也、諸書にいふ所、我國中華俱に同說也、彼簡簫乙の三字の靈符に恐れて、疫邪の鬼神、川を渡り得ざりしも同じきか、或は又洞家の祖師道元禪師、中華に傳法の頃、山中にして癘鬼に逢れし時一偶あり、左の如し、

無位眞人現面門　智惠愚痴通般若　靈光分明輝大千　神鬼何處著手脚

と示されたり、妙驗さらに疑ふべからず、今諸國此四句を門戸に貼し、或は右の三字の靈符を書して、疫癘を避るとするも故あるかな、

〔燕石雜志三上〕鬼神餘論

世に疫鬼痘鬼といふものあり、疫鬼は俗にいふ疫病神、痘鬼は俗にいふ疱瘡神なり、和名鈔に、瘧鬼、邪鬼、窮鬼等を出せり、窮鬼の人の家にあるを耗といふ、世俗貧乏神といふは是なり、和名鈔に云、瘧鬼、蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子亡去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、和名衣也於美乃加美或爾邪鬼、日本紀云、邪鬼和名安之岐毛乃窮鬼、遊仙窟云、窮鬼師說、伊岐須太萬といへり、みなこれ大陽の毒にて、一時の氣運に乘じて流行す、顓頊の子亡去て疫鬼となるといふものは誕妄のみ、疫癘は冬より發りて春夏の間最も盛なり、その寒に傷らるゝもの、春夏大陽の毒に觸て誘引はる故に、和漢除夜に儺して